貴方の色に染まりたい　最終話です。

手術から半年――

柔らかい日差しの降り注ぐ午後。二人並んでソファに座り手を繋いでテレビを観ていると、安西のお腹がグルルと動いた。

「しのざき、」

「おしっこ？うんちかな」

甘えた呼び方一つで篠崎はすぐにオムツだと分かってくれる。

「……うんち……」

「もう出たかな」

「や、」

なぜそんな意地悪なことを聞くのだろう。ずっと抱っこで排泄を続けていたのでもうそれがないと排泄ができなくなっているというのに。それを篠崎だって知っているはずなのに。

「すまない」

やはり分かっていたのだ。声が笑っている。篠崎がリモコンでテレビを消した。それからようやくおいでと広げてもらった腕の中に飛び込み向かい合って膝の上に座る。

「しのざき、出ちゃう……」

「うん、いいよ」

篠崎が背中をぽんぽんしてくれるのを待ってお腹に力を入れる。めり、と小さな音がしてアナルが拡がった。

「ぁっ……」

「うんち出てる？」

「んっ、お尻拡がっ……あっ、んんっ」

んんーっと思いきり力を入れるとにゅる、とうんちが出た。食事は野菜中心、篠崎に言われてしっかりと水分補給もしているので柔らかい。そして排泄で甘える時間が好きなせいか、日に何度も出る。だから一回ごとの量は少ない。

「……は、出た……」

「いいこ。自分でちゃんと出せたな」

篠崎の足から降りてソファに寝転ぶ。あとは篠崎がテープを剥がしたら膝裏を持ち、恥ずかしいところがしっかりと見えるようにするだけでいい。

「上手にうんちを出せて偉かったな。さあお尻を綺麗にしよう」

そう言いながら、篠崎はクリトリスをツンと突く。正確にはクリトリスを包むカップを、だ。

「おしっこの穴の周りが勃起しているよ」

「やん……」

安西のクリトリスの位置は普通の女性器とは違う場所にある。元々ペニスのあった場所のままの尿道口の上にあるからだ。そこはどうしてもオムツで擦れてしまって射精管理をされると我慢が辛くて、クリトリスをカバーするカップを装着してもらっている。カップ自体は半球状で、クリトリスを包むだけなので直径、高さ共に二センチほど。それをゴムバンドで腰骨の辺りをぐるりと一周させての装着。最初は股の間も通すものを使ったのだけれどそれだとうんちの度に外さなければならなかったのですぐに買い換えたのだ。いつでも自由にうんちができるように。

今では装着していることが当たり前になったカップはクリトリスを刺激から守ってくれている。言わばクリトリス包皮のような役割を担ってくれているのだ。それをつん、と再び突かれて雰囲気に感じてしまう。

「うんちで感じちゃったかな」

篠崎はそう言ってまたクリトリスカップを突くけれど、亀頭から作った疑似クリトリスは感じても勃起はできない。感じて勃起するのはクリトリスの下の尿道口の周りだ。勃起と言っても小さく膨れる程度。おちんちんがあった、その名残。

「ぁっ、ン……」

やめてほしい。もっと感じてしまう。クリトリスも尿道口も、お尻も弄ってほしくなってしまう。

「ゃん、やめ……」

「あぁ、すまない、早く拭かないとお尻が痒くなってしまうな」

篠崎が悪戯をやめてお尻拭きを取った。やめて欲しいと言ったのは自分なのに、いざやめられるともう少ししてほしかったな、と残念に思う。

「うん、健康的なうんちだ」

「ゃだぁ……」

この確認は排泄の度にされる。うんちの色、硬さ、量。お尻を上げたままの体勢で健康状態をチェックしてもらうのだ。うんちの載ったオムツが引き抜かれ、新しいオムツをあててもらう。そしてお尻を綺麗に拭ってもらう。

「……ん？」

「え？」

どうしたのだろう、お尻を拭きながら篠崎が首を傾げている。

「諒くん、もう少し出そうじゃないか？」

「え？」

「アナルからすぐのところにうんちがありそうだよ。拭いても拭いてもうんちがついてしまう」

恥ずかしいことを言われ身体がカッと熱くなる。

「うんち、もう一度してごらん」

「え、」

そう言いながら篠崎はオムツを直してくれない。あとはオムツを閉じてテープを貼ってくれるだけなのに。
「ほら、諒」
「やだぁ……」
うんちが出るところを見られたことはない。いつもうんちを出してから綺麗にしてもらうだけだ。
「諒。いいこだから。このままうんちを出してごらん」
「やあ……」
つい声が甘えてしまう。だって見てほしい。頑張ってうんちを出すところを。
「諒」
その一押しに負けたふりをしていきむ。だって自ら望んでなんて恥ずかしい。きっとバレているのだろうけれど。
「んっ……」
「いいこ。アナルが膨れた」
「んん」
「あ、」
「え？」
「おしっこが出たよ」
「やっ、」
「可愛い。いきんだからおしっこまで出ちゃったんだな」
そう言って篠崎は尿道口やタマを拭い、クリトリスカップまで外してカップについたおしっこを拭き取った。
「やぁ…」
「大丈夫、もう一度んーってしてごらん」
「んーっ！」
でもなかなか出てこない。だって姿勢が違う。抱っこじゃない。
「だっこ……」
「それではうんちが出ているところが見えないな」
「やだぁ、これじゃうんち出ないっ……」
イヤイヤとぐずると篠崎は少し考え、そして身体を起こしてくれた。寝室に行こうと言われ、オムツもしないままついていく。
「しのざき、」
篠崎はベッドのすぐ横の床に新聞紙を敷いた。まさか――
「おいで」
思った通りだった。篠崎は床の新聞紙を跨ぐようにして足を広げ、ベッドに座っている。その向かいには身支度用にと置かれている全身鏡がある。篠崎は鏡越しに排泄を見ようと

しているのだ。
恥ずかしいけれど見てほしいという欲求には抗えず膝の上に座る。
篠崎が足を開いているから安西もベッドについた膝で身体を支え、落ちないように篠崎にしがみつく。この姿勢で排泄をすれば、うんちは床の新聞紙の上に落ちる。
「うんち……」
「待たせたな、すまない。もう出していいよ」
また優しく背中をぽんぽんしてもらう。躾けられた身体はそれだけでうんちを出すのだと認識する。
「んんっ……」
さっきは本当にもう出ないと思ったのに、こうして篠崎に出ると言われたらうんちが出てしまうから不思議だ。この身体は本当に篠崎の思う通りになってしまうらしい。
「んんんんっ……ぁ、ああ……」
ころん、と小さなうんちが出る。気持ちいい。しかし役目を終えたアナルはすぐに閉じてしまう。少しだけ寂しい。篠崎にたくさん愛されたアナルは開いているときの方が幸せなのに。
「あぁ……」
もう終わってしまった。さすがにもう出ない。それが寂しい。だってもっとうんちを出すところを見てほしい。そして上手に出せるようになったなと褒めてほしい。自分で出せるようになって偉いなと。

〜〜〜〜

手術からそう時間が経っていない頃、おちんちんがない絶望感に落ち込んだ時期があった。イきたいのに上手にイけなくて苦しかったとき。夢の中でおちんちんを扱いて射精して、絶頂の瞬間に目を覚ましたとき。篠崎は優しかった。「おちんちんをなくした後は落ち込んでしまうことがあるんだよ」とぎゅっと抱きしめてくれた。
「おちんちん〜〜っ！！」
「うん、おちんちんなくて悲しいな」
「やだあ！！おちんちん！僕のおちんちん！！」
「うん……」
「あああああ！！！！」
おちんちんがある夢を見たときの目覚めは最悪だった。起きたばかりで夢と現実の区別がつかなくて、おちんちんの手術をしたことが夢だと思っていて、混乱したままおちんちんに触ろうとしたのにそこにはオムツがあって。
「おちんちん！！なんでっ！！なんでええええ！！」
「諒……」

「やだああ！！おちんちんごしごししたいいい！！」
だって夢の中ではおちんちんを握って扱いて、とても気持ち良かったのだ。それなのにおちんちんがないなんて、もう現実ではあんな気持ちよくなることができないなんて。
「諒くん、おちんちんはないよ。ほら、オムツを外して見てみよう」
「やっ！！！」
抱きしめようとしてくれた篠崎を突き飛ばす。
「やだあ！おちんちんある！！あるからっ！」
「ないよ、諒くんは手術でおちんちんとお別れをしたよ」
「だって！！だってさっきおちんちんごしごししたっ！」
「それは夢だよ。夢だ。精液をお漏らししていないか確認しよう」
「やだ！！」
もう眠気は冷めていて、これが現実だと分かっていた。けれど受け入れられなくて、受け入れたくなくて、そして篠崎を困らせてやりたかった。だって自分はおちんちんがなくてこんなに辛いのだと訴えたかった。分かってほしかった。篠崎にはおちんちんがあって羨ましかった。篠崎はおちんちんをごしごしして気持ち良く射精ができるのに、安西はそれができない。もちろん篠崎のおちんちんがなくなってしまったら篠崎にセックスをしてもらえなくなってしまうからそれは嫌だし、安西が辛いのだから篠崎も同じ思いをしろなんてことは思わないけれど、この辛い気持ちを分かってほしかった。
「諒くん、精液をお漏らししていたら被れてしまうかもしれない。痛いのは嫌だろう？」
「いや！！うるさい！！！おちんちんあるからいい！！！」
「……諒、落ち着いて。抱っこをしよう」
八つ当たりなのに、篠崎はそんなときに一度も怒ったりはしなかった。勝手にしろと投げられてしまうこともなかった。忍耐強く、そして安西の気が済むまで付き合ってくれていた。
どれほど辛かっただろう。そのときの安西は余裕がなかったけれど、篠崎はきっととても悲しい思いをしていたに違いない。

「諒？」
「あ……」
「どうした」
手が止まってしまっていた。過去のことを思い出してしまっていた。
過去――そう思うのだけれど、実際にはまだ半年しか経っていない。気持ちいい射精ができないという苦しみは日が経つごとに膨らんでいく。
「……少し疲れたかな」
「あ……」
安西がもういやらしい気分ではないことに敏い篠崎はすぐに気付く。そして慰めるよう

に抱きしめられる。
　そうだ、自分はあの頃と――おちんちんがあるのだと言い張っていた頃と――何も変わっていない。暴れなくなった、声を荒げなくなっただけで、まだ完全には受け入れきれていないのだ。
「シャワーを浴びようか。身体を綺麗にしてアイスでも食べよう」
「しのざき、」
　突然こうして落ち込んでしまう安西を、篠崎は優しく包み込んでくれる。
「ほら、抱っこで行こうな」
　抱え上げられ浴室に運ばれる。服も脱がせてくれるし、身体だって優しく洗ってくれる。その後は身体も拭いてくれるし、オムツもしてくれる。
「何味がいい？」
「……キャラメル」
　篠崎が用意してくれたアイスを、篠崎の手ずから食べさせてもらう。安西はただ甘やかされるだけで何もしない。
「美味しい？」
　頷き、下を向く。こんなんじゃいつか捨てられてしまう。面倒だからいらないと言われてしまう。わかっているのに、心がついていかない。
「……抱っこ」
「アイスは？」
「いらない」
　まだ二口しか食べていない。食べる気がないなら最初から断ればよかったのに。自分がどんどん嫌な奴になっていく。分かっているのに止められない。
「じゃあ冷蔵庫に入れておくよ。また後で食べような」
　やはり篠崎は文句を言わない。怒らない。怒ればいいのに。何様だと。いつまでそうやって現実から逃げているんだと。――手術を望んだのは自分だろうと。
「ほら、抱っこ」
　戻ってきた篠崎はすぐに抱っこをしてくれる。対面で膝に乗せてもらい、背中をぽんぽんしてもらう。広い肩に頬を置く。
「……諒くんは少しお兄ちゃんになってきたな」
「え？」
「ずっと赤ん坊だったのに、お兄ちゃんになってきた」
　それはどういう意味なのだろう。成長しているとはとても思えないから、他に意味があるはずだ。反抗期だろうか。
「いろんなことが見えるようになって、不安なんだろう」
「……そんなこと……」
「赤ん坊はされるがままだろう。意思表示も論理的ではなく単なる本能だ。けれど大きく

なってくると色々なことが分かってくる。自分の置かれた立場や、状況が」
「……」
「……本当は赤ん坊のままでいてほしかった」
「っ……」
やはりこんな風に聞き分けのない我儘は耐えがたいのだろう。
「ごめ」
「諒。違うよ、俺の我儘だ」
「え……？」
「赤ん坊は何も考えず、ただ甘えて全てを委ねるだろう。そうしてほしかったんだ」
「え……と、」
何が言いたいのだろう。
「諒くんの全てが欲しい。排泄の管理だけじゃ足りない。何も考えず、もっと甘えてほしい。起きてから寝るまで、いや寝ている間だって全てを委ねてほしい」
「けど……」
「けど、じゃないんだ。赤ん坊は〝けど〟なんて考えない」
全てを、篠崎に委ねる――
「……意思のない人形になってほしいわけじゃない。ぐずったっていい。夜泣きで起こしてくれても構わない。我儘だって言っていい。でも全てを任せてほしい」
言葉が浮かばなかった。篠崎は真剣だ。本気でそう思っているのだ。安西に、本能のままに生きる赤ん坊になってほしい、と。
「とにかく甘えてほしい。オムツを汚した時に呼んでくれるように。あんな風に欲求を伝えてほしい」
あんな風――甘えた声で篠崎を呼ぶだけだ。篠崎があとは全てをしてくれる。安西は何もしない。おしっこかうんちか、そう訊かれれば答えるけれど、そもそもオムツだということすら言わない。篠崎が分かってくれるから。
「しのざき」
わざと甘えた声を出す。途端、篠崎の頬が緩んだ。真剣な硬い表情から優しい、嬉しそうな顔へ。
あぁ、やはり本気なのだ。本気で安西を赤ちゃんとして可愛がろうとしてくれている。甘えたい。いっぱい我儘を言ってそれも受け入れてもらって――子供の頃にできなかったことをさせてもらえる。もう一度赤ちゃんからやり直せる。
「うん、どうした」
「赤ちゃんはえっちなおねだりはしない……？」
「諒くんは中身が赤ん坊なだけで身体は大人だから、えっちなおねだりもしていいんだよ」
あぁ、なんていやらしい言葉なのだろう。赤ちゃんなのに身体は大人だから――。
「でも自分じゃ精液出せない……」

「うん、だから俺が吸っているだろう」
「……しのざきの赤ちゃんになる……なりたい……」

〜〜〜〜

一週間後――
「しのざき」
「うん？」
書斎を覗く。篠崎がパソコンから視線を外しこちらを見た。
「どうした、おしっこかな、うんちか？」
「抱っこ……」
「あぁすまない、寂しかったな」
おいで、と言われて椅子に座ったままの篠崎の上に座る。立派な椅子は二人分の体重を支えても少しの音も立てない。
「ん……」
抱きしめてもらいながら背中を撫でてもらう。首筋の匂いを嗅ぐ。落ち着く。だってもう二時間も構ってもらえなくて寂しかったのだ。
「……諒くん、おしっこは？」
「……わかんない……」
「もう二時間経ってる。そろそろまた濡れているんじゃないか」
「……見て……」
「ベッドに行こうか？それともここで確認する？」
「ここ……」
ベッドに行く余裕なんてない。早く見てほしい。恥ずかしいところを構ってほしい。
自ら床に座り、篠崎がオムツのテープを外してくれるのを待つ。
「あぁ、尿パッドが濡れてるな。オムツは濡れていない。パッドだけ交換しよう」
書斎にもオムツセットがある。汚れた尿パッドだけを替えてもらい、尿道口を優しく拭ってもらう。もっと弄ってほしかったのにそのままオムツを留められてしまった。
「できたよ」
「……ン」
もう終わってしまった。書斎から出て行かないと。篠崎は仕事があるのだから。
「諒くん」
「……はい……」
促され、渋々立ち上がる。本当はもっと抱っこをしてほしい。背中もとんとんしてほし

いし、クリトリスだって指先で擽ってほしい。まだあと一週間は射精禁止だけれど、むずむずするから弄ってほしいのだ。昂れば昂るほど我慢は辛いけれど、我慢が辛かった分、イくときの快感が大きいから。

「諒、待ちなさい」

腕を掴み引き止められる。

「赤ん坊は相手に気を遣うことはないよ」

「けど、仕事」

「けど、じゃないと教えただろう」

「……」

でも、という言葉しか浮かばない。仕事だってしないといけない。確かに篠崎の財産を考えれば仕事なんてしなくても生きていけるのだろうけれど、この若さで仕事もせずに二人でいちゃいちゃするだけで生きていくなんて不健全だ。それに篠崎が仕事に生きがいを見つけているのを知っている。それでなくても術後からずっと構ってもらっていたのだから。

「お昼寝してきます」

「一人で眠れるのか」

「テディと……」

篠崎が買ってくれたテディ。うんちやオムツ替えが恥ずかしかった安西に、篠崎が抱っこしていなさいとくれたものだ。

「じゃあ寝かしつけをしてあげよう」

「ほんと？」

「テディだけじゃまだ上手に眠れないだろう」

「ん……」

手を繋いで寝室に入る。横になって、お昼寝用のタオルケットを掛けてもらう。安西は篠崎の腕枕。テディは背中側に座っている。

「寝るのは怖くないよ、大丈夫」

赤ちゃんが寝るのが下手なのは、眠るのが怖いからだと聞いたことがある。だから篠崎もこうして寝かしつけのときに怖くないとぽんぽんしてくれるのだけれど、安西が寝たら篠崎は仕事に戻ってしまう。そう思うと怖くて寂しくてたまらない。甘えていい、ぐずっていいと言われ続けたら本当に我儘になってしまった。

「やぁ……」

「ん？」

「おやすみのちゅうは」

「あぁ、すまない、寂しかったな」

篠崎に前髪を上げられて、額へのキス。確かに寝かしつけの前はいつもそれだけど、それじゃ足りない。

「もっと」
「どこに欲しい？」
本当は仕事に早く戻りたいだろうに、篠崎は時間を気にしていないようなゆったりした声で訊いてくれる。
「ロ、あとクリトリス……」
「クリトリス？それじゃおやすみのキスにならないだろう」
篠崎の言う通りなので何も言い返せない。篠崎のシャツをぎゅうと握る。
「諒くんは今えっちな気分なのかな」
額を胸に擦りつけるようにして頷く。
「そうか、でもあと一週間はイってはいけないよ」
言われなくても分かってる。けれどもうずっとイってない。タマはパンパンで行き場を失った精子がぐるぐると渦巻いている。
「ねんねできるかな」
「ん……」
唇にキスを貰って、それだけで目を閉じる。トクントクンとリズムを刻む心音に耳を澄ませて目を閉じればまるで条件反射のように眠りに落ちた。

〜〜〜〜

「その前にオムツを綺麗にしような。寝ている間におしっこが出ているだろう」
「んっ……お股きれいきれいしてください……」
足を広げ、間に篠崎を入れる。昨夜はたくさん出たのか少し蒸れた感じがしているので、もしかしたら尿パッドだけでなくオムツごと交換しなければならないかもしれない。
「あぁ、沢山出たな。オムツを替えよう」
やっぱり――。尿パッドの交換も恥ずかしくて好きなのだけれど、やはりオムツを替えてもらう方が好きだ。尿パッドの交換より恥ずかしいし、すっきりもする。
「きれいにしような」
クリトリスカップも外され、クリトリスを丁寧に拭かれる。これは朝昼晩と三回されることだ。カップで蒸れてしまうからと綺麗にしてもらうのだ。
「ぁんっ……」
「クリトリス気持ちがいいな」
ウェットのお尻拭きで抓むようにしてクリトリスを拭かれる、それがとても気持ちいい。早く尿道口も拭いてほしいけれど、クリトリスだけをずっと拭いていてほしいとも思ってしまう。
「分かりやすいな、おしっこの穴の周りが膨らんでるよ」
「ぁっ、だってきもちっ……」

きゅっきゅ、とお尻拭き越しにクリトリスが抓まれる。気持ちいい。擦ってほしい。けれどそうはしてもらえない。
「ぁんっ、あっ！」
「うん、夜まであとちょっと我慢して、沢山気持ち良くなろうな」
「はい……」
気持ちはすでに射精したくて堪らない。今すぐにでも射精したい。けれどそれは勿体ないと自分に言い聞かす。
「うん、クリトリス綺麗になったよ」
クリトリスが綺麗になったら、今度はパウダーをクリトリスに叩いてもらう。カップで蒸れてしまわないように。これもいかにもお世話という感じがしてとても気持ちいい。
「次はおしっこの穴を綺麗にしような」
「はい……」
篠崎が綿棒を取り出した。尿道のお掃除だ。
「痛くないよ、怖くない」
「んっ……」
あくまで赤ちゃんとして扱われるのでそうやって安心させてくれるけれど、実際には痛みも恐怖も微塵もない。あるのは羞恥と快感だけだ。
「あああっ！！」
オイルだかローションだかを付けた綿棒の先っぽだけを尿道口に入れられてくるくると回される。気持ちいい。気持ちいい。射精したい。今すぐ射精したい。
「諒くん、タマタマがせり上がってきたよ。落ち着かないと、夜までもたなくなってしまうよ」
「あっ、ごめっ……でもきもちっ」
「うん、諒くんはおしっこの穴をお掃除されるのが大好きなんだよな。気持ちいいな」
「ああっ！！」
くるくると回されながら、少しだけ奥に入れられる。そしてまたくるくるしながら手前へ。
「あぁ、だめっ、イきたいっ！」
「諒くん、今はえっちの時間じゃなく赤ん坊のお股のお掃除の時間だよ」
「あ……」
「赤ん坊は射精なんてしないな」
「はい、射精しないです……」
「うん、じゃあもう少し綺麗にしような」
またくるくる綿棒が回される。気持ちいい。でもだんだん足りなくなってくる。もっと奥まで入れてほしい。もっと奥まで入れてもらえたら前立腺をぐりぐりしてもらえるのに。
もっと、もっと——

「……うん、よし、これくらいでいいかな」
「あっ……」
高まっていった性感が急にストンと落とされてしまう。物足りない。苦しい。おしっこの穴が切ない。
「ん？」
「……何でもないです……」
「じゃあ今度はタマタマを綺麗にしような」
タマはぷりっとひり出されてからつるつるになった表面を擦るように拭かれる。ここはいつも少しだけ強くされる。
「あっ、あっ！！っ、ぁっ」
気持ちいい。けれど擦られて少しだけ痛い。痛い、それが気持ちいい。

〜〜〜〜

ずん、と力強い挿入だった。先ほどまで入っていたから痛みはない。むしろ少し時間が空いたことでアナルが再度の挿入を喜びうねっている。
「あああああ！！」
「っく、すごいな……」
「ああっ、きもちっ、お尻気持ちいい！」
「あぁ、俺もだ……」
尿道に漏斗を挿入したままなので、当たらないようにと篠崎は身体を起こしている。でもできれば上体を下げ、ぎゅうと抱きしめて、キスや乳首への愛撫もして欲しい。けれど今はセックスをしているわけではないのだと思い直す。
今はアナルを貸しているのだ。篠崎のオナニーのための道具として。
「あっ、ああっ！あっ、だめっ、イっ、イっちゃっ！！」
「あぁ、すごくいい……締まってる」
篠崎は動きを止めなかった。そのままガンガンと痛いくらいに最奥を突かれる。その容赦のない動きが――篠崎が自身の快感だけを追う姿が、安西が道具なのだと自覚させる。それがとても嬉しかった。
「あああああ！！」
びゅく、とタマが震えた。お尻を犯されて絶頂を迎えたのだ。強引な絶頂だった。前立腺を弄られるときの繊細さは微塵もなかった。
「っは、すごい……気持ちいいよ……すごく良く締まる」
「あああああ！」
普段ならここで抜いて尿道に口をつけて精液を吸ってくれるのに。尿道に精液が詰まっていて苦しい。なのに篠崎はまだ腰を振る。射精を求めて何度も。

「ああっ！ああっ！！またっ、またイっ……！」
イったらダメなのに。イっていいのは一度だけなのに。ダメなのに――
「だめぇっ！あああああ！！」
ぐちゅ、と尿道に不快感。飛び出すことができず尿道に溜まっていた精液が二度目の絶頂で押し流され、溢れ出たのだ。
「あああ……ごめっ、ごめ、なさっ」
イってしまった。だめなのに。
「諒っ……」
「ぐえええっ、ううっ」
最奥を痛いくらいに突かれ、臓器が胃を押し潰す感覚があった。そしてそのまま、最奥を貫いたままの制止。
「ううっ、ぐふっ……」
「諒……大丈夫か」
「うぅ……しのざき……」
くらくらする。腹の奥が痛い。鈍痛。痛い。抜いてほしい。お腹が痛い。
「おなかいたい……」
「っ、すまない」
篠崎がずるっとペニスを抜いた。漂う異臭。コンドームにはきっと沢山の汚れが付着しているのだろう。手が汚れることも気にせず、篠崎がそれをゴミ箱に投げ捨てた。そして尿道口へ唇が触れた。
「あっ……」
「少し耐えてくれ」
ジュウウウと音がするほど強い吸引。機械だってあるのに、篠崎は口でしてくれた。気持ちいい。けれどお腹の奥が痛い。
何度かに分けて嚥下しながら篠崎は最後の最後までしっかり精液を吸い出してくれた。
「しのざき……」
「お腹痛いか」
「いたい……」

〜〜〜〜

「あ……ごめんなさい、その、ちょっと買い物に出ようと思って」
安西の言葉を聞いた篠崎の表情が落ち着く。やはり驚かせてしまったようだ。
「買い物？足りないものがあったか」
「や、足りないっていうか、どうしても夜ご飯に食べたいものがあって、材料が足りなくて……だから、その買い物に行ってき……」

行ってきますなのか、行ってきてもいいですかなのか、分からなくなってしまった。
安西は一人で買い物に行こうと思っている。篠崎は仕事があるから、一人で行って帰ってくる。一人で外に出てはいけないと言われているわけではないし、そもそも今までしっかりと一人で生活をしてきたのだ。この辺りは治安が悪いわけでもないし、外はまだ明るい。なのに、急に自分がとても悪いことをしている気持ちになった。一人で出掛けるということはとても身勝手なことなのだと。途端に罪悪感が生まれる。
安西が我慢をして他のものを作ればいいだけの話なのだ、本当は。買い物には明日篠崎に時間を作ってもらって計画的に行けばいい。そして肉詰めは明日作る、それだけ。
「ごめんなさい……やっぱりやめます」
「……諒、おいで」
篠崎に手を引かれて書斎に入る。
「しのざき……」
この罪悪感はどこから来るのだろう。だって悪いことをしようとしているわけじゃない。なのに篠崎を裏切っているような気分になる。
「諒くんは赤ん坊だろう」
「……はい」
「……ズボンまで履いて……このズボンの中はどうなってる？」
「……オムツです……」
「オムツの中は？」
「尿パッド……あとクリトリスカップです……」
「うん、そうだな。そんないやらしい恰好で一人で外を歩いたらどうなるかな」
「え……？」
「ズボンの膨らみで、オムツが他の男にばれてしまうかもしれない。ファスナーのところがカップで膨らんでいるのを見て小さなおちんちんが勃起していると思われるかもしれない」
「や……」
違う、と首を振るけれど篠崎の言う通りということは分かっていた。
「もし痴漢が諒くんのお股を触ったらどうなるかな。オムツだということはすぐにバレてしまうし、本当ならおちんちんがあるはずの場所に小さなカップがあることにも気付かれてしまうかもしれない」
「やだぁ……」
痴漢なんてされるはずがない。スーパーなら歩いても行けるし、身体がぶつかってしまう程の人混みにもならない。なのに、篠崎の言葉に怖くなってしまう。
「オムツにおしっこをお漏らししながら一人で歩くのかな」
「ぁ……」
「うんちだってもう長くは我慢はできないだろう？道の真ん中でうんちが出てしまいそう

になったらどうする？一人でうんちできるかな」
「やぁ……」
オムツによって「いつでもうんちをしていい」と擦りこまれた身体。それでも篠崎の膝に乗るまで我慢ができるのは、「うんちは篠崎の上でするもの」と擦りこまれたからに他ならない。普通の人がトイレまでなら我慢ができて、トイレに座ってならスムーズに排泄できるのと同じだ。
しかし、トイレならお店でも借りることができるけれど、安西が一人で買い物に出て催してしまったらどうしたらいいか分からなくなってしまう——分からなくなるようになってしまった。思考を不要のものと擦りこまれ、篠崎の言葉が正と教えられた脳。それだって排泄だって、強烈な快感と共に教え込まれたのだ。安西には抗いようのない状況で。
例えばオムツは褒められる快感だった。「うんちするの気持ちいいな」と最初に排泄すること自体が気持ちいいものだと教えられ、それに馴染んだ頃に「上手にうんちができたな」とご褒美に気持ちいいこともしてもらって自然にオムツに排泄することを覚えて行った。
思考については射精の寸止めの時間に教えられた。お尻の中から前立腺を擦られ、クリトリスをローションで濡れた指でゆっくりと円を描くように撫でられながら、もうあと少しでイってしまう、そのギリギリのタイミングの問答によって教え込まれた。
「気持ちいいな？」
「はい……」。
「射精したいな？」
「はいッ……」
クリトリスの一番先端をつん、と小さく突かれる。
「射精はどこからするのかな」
「おしっこの穴っ」
「おちんちんないのに射精できるのかな」
「ァッ、んっ……出せなっ、からぁっ、吸ってっ、あっ」
くり、と前立腺が擦られた。けれど、一度だけ。それからは触れるか触れないかの強さで撫でられるだけだ。
「何に吸ってもらう？」
「きかいっ、機械かしのざきっ」
あぁもうイきたい。あと少し、尿道口を吸ってもらえればもうイけるのに。
「どんな機械に吸ってもらうのかな」
「赤ちゃん、のっ、鼻水っ、吸うやつっ」
ここに至るまでにすでに一時間以上焦らされ続けている。もう限界だった。
「赤ん坊のものを使うのか。諒くんは赤ん坊だったのかな」
「はいっ……」
「誰の？」

「しのざきのっ」
「どんなところが赤ん坊？」
「ぜん、ぶ……」
イきたくてイきたくて頭がおかしくなりそうだ。
「全部？」
「オムツっ」
「あとは」
「哺乳瓶っ、おふろ、もっ」
あぁもう限界なのに、いつまで答えないといけないのだろう。頭が真っ白になっていく。
そうしてもう本当に本当にこれ以上は無理だ、と思うところから篠崎の問いかけが変わってくる。具体的に答えさせる質問からイエス、ノーで答えられる質問になるのだ。
「そうか、赤ん坊なんだな」
「はいっ」
「赤ん坊は射精するのかな」
「しないっ」
「うん、そうだな、赤ん坊は射精ができない。だってまだ勃起もできないし、精子も作られていないからな」
「んっ」
「赤ん坊は勃起ができない」
「んんっ」
「諒くんも勃起はできないな」
「はいっ」
「勃起するおちんちんがないな」
「はいっ」
「なら諒くんは射精するのかな」
「しないっ」
「うん、諒くんは赤ん坊だし、おちんちんがないから射精しないな」
「んっ、んっ！」
イく寸前、イかない程度に弱められた快感をゆったりと与えられギリギリのところで続けられる問答。頭の中は「あと少し強くしてほしい」それしかない状態での受け答え。はっとするのはいつも最後の問いかけに答えてしまってからなのだ。
はっとして、違う、待って、と言いそうになるとき、篠崎が優しく笑うのだ。「いいこだ」
「可愛い」「諒くんはちゃんと物事を理解できて偉いな」そうやって、安西が正しい答えを述べたと擦り込んでいく。
「諒くんは赤ん坊にもあるおちんちんすらないな」
「あぁ……」

「可愛いお股だよ。諒くんだけの特別な身体だ」
「あ……特別……？」
気付けばいつの間にか篠崎に抱きしめられている。ということはいつの間にかアナルから指は抜かれ、クリトリスからも離れているのだ。でもそれがどのタイミングだったのかはもうぐちゃぐちゃの安西には分からない。
「そう、特別。頑張り屋さんの諒くんだから手に入れられた可愛い身体だよ」
「頑張り屋……？」
「そう。手術だってちゃんと頑張れたし、射精だってちゃんと我慢できる、いいこの諒くんの可愛いお股」
「あ……」
頑張り屋で、我慢ができる、いいこ――。
そうやって何分間でも言葉を変えながら褒め続け、安西がぽーっとなってきたところで訊くのだ。
「射精したいかな」
そうすると安西は考えもせずに言ってしまう。
「赤ちゃんだから射精できない……」

〜〜〜〜

「あの……うんち、やっぱり管理してほしいです。お腹が痛いときは出ちゃうけど、自分では出せないようになりたい……」
「そうか。じゃあお湯で排泄することに慣れていこうか。そしたら自然排便はできなくなるから」
「えと……」
「ん？言っていいんだよ。可愛くおねだりしてごらん」
「お湯じゃなくて、篠崎のおしっこ……」
「俺の尿で浣腸されたい？」
「はい……だめですか」
「わかった。じゃあそうしようか」
「あ、あの、その、洗浄前に入れることになっちゃうので、その、漏斗とか、シリンジで……」
「間接的にされたい？」
「……はい……その、直接もされたいので、それは洗浄の後にしてほしいです。うんちのときは篠崎のおしっこを見てからそれを入れてほしいです」
「俺の尿だって意識したい？」
「はい……」

「あぁ、諒くんはとてもいやらしい子になれたな。嬉しいよ」
「しのざき……」
「可愛い。可愛くてたまらない。どうしようか。みんなに見せびらかしたいな。アメリカに行こうか」
「え」
「アメリカならそういう店がある。見せびらかすだけだ。触らせたりなんかしないよ。諒くんはいつも通りオムツでいてくれたらいい」
「恥ずかしい……その、お股も見られちゃう？」
「あぁ、もちろん。可愛いお股を沢山の人に見てもらおう」
「あ……見てほしい……」
「まずはうんちが出せなくなるようになってからだな。うんちが自分でできなくなったらアメリカに行こう」
「はい！毎日おしっこ入れてください」
「うん、毎日ちゃんとおしっこでうんちしような」
「嬉しい……」
涙が出た。とても変態なお願いなのに篠崎は嫌がらなかった。それどころか見せびらかしたいと言ってくれた。自分を受け入れてもらえたと思った。

じゃあ早速、と篠崎はすぐに準備をしてくれた。

〜〜〜〜

診察室だろうと思ったのに、案内されたのはとても広い病室だった。大きなベッド、ソファ、テーブル、テレビ。二泊だけだけれど、快適に過ごせそうな気がする。まるで豪華なホテルのよう。
病室のソファに座っていると、ノックと共に男が二人入ってきた。
「こんにちは。初めまして。担当医の大内といいます」
「こんにちは。看護師の狭山です」
「宜しくお願いします」
二人ともとても穏やかそうな人だった。会釈しソファを勧める。
「今日はお尻の手術でお間違いありませんね」
「……はい」
恥ずかしい。もちろん手術の申し込みの時点で手術内容は伝えてあるはずだけれど、やはり確認は必要なのだろう。
「肛門には内肛門括約筋と外肛門括約筋という二種類があります。普段、意識せずに便が

漏れないのは内肛門括約筋が締まっているからです。そして便が下りてきて、トイレに行きたいと思った時に意識的に締められるのが外肛門括約筋です。今回の手術は内肛門括約筋を故意に損傷させます。すると、便失禁するようになります」
「はい……」
「便のお漏らしが嫌になった時、再手術で治るかどうかはわかりません」
「……はい」
「もう、二度とお漏らししない生活には戻れない。その覚悟はおありですか」
隣に座る篠崎をちらりと見る。微かな微笑み。
選んでいい、と言ってくれている気がした。嫌なら嫌で、帰ろうと。
「大丈夫です。……彼がお世話をしてくれるので」
だよね？という意味で隣を見ると、先ほどよりしっかりとした笑顔で頷いてくれた。
「お二人なら大丈夫そうですね。では手術の準備をしますので、準備が終わり次第お声かけさせていただきます。しばらくゆっくりしてくださいね」

〜〜〜〜

戻ってきた篠崎が手にしていたのは棒だった。尿道ブジー。けれどかなり短いものだ。おちんちんがあったときは栓としてしか使わなかったようなもの。
「俺がこれを持っているから、これを尿道に入れて腰を振りなさい。イくまでだ」
「え……」
「この長さなら諒の前立腺に届く」
「や……こわ……」
自分で腰を振る。尿道から前立腺を刺激するために腰を振るなんて。女を抱くように、抜き差しするように動かすということだ。
「怖くない。オナニーがしたかったんだろう？」
「……ごめんなさい」
「謝罪はいらないよ。お仕置だ。きちんと腰を振りなさい」
「……はい」
篠崎の気持ちは変わりそうになかった。篠崎が肘をついて頭を支えるようにして寝転がり、空いた手でブジーを持つ。
「ここだ。自分でローションを付けて濡らしなさい」
「はい……」
カテーテルで排尿管理をしてもらっていたことがあるので、尿道で咥えこむことに恐怖はない。けれど腰を振るなんて、そんなの——腰の振り方だって分からないし、尿道をそんなに激しい動きでいじっていいものなのだろうか、という不安があった。

「イくまでだ。わかったな」
「はい……」
ブジーを消毒し、専用のローションで濡らす。自分でオムツを剥がし、足を開いて座り尿道口にも直接消毒とローションを垂らした。
「……ごめんなさい」
いけないことをした。許して欲しいからではなく、心から反省してそう言うけれど篠崎は何も言わなかった。
四つん這いの姿勢になり、篠崎の持つブジーに陰部を近付ける。腰の位置を調節して、そっと腰を押し付けた。
「ああっ……」
「上手に飲み込むな」
「ああ……入って……入ってる……」
「うん……まだもう少し入れないと前立腺には届かないよ」
「はい……」
篠崎にしてもらったときの強い快感を思い出す。目を閉じて、前立腺を意識しながら更に腰を進める。ずぷ……とブジーが中に入ってくる。気持ちがいい。狭いところを押し拡げられている。
「あぁ……すごい……」
「尿道オナニーは気持ちいいか」
「はい……おしっこの穴気持ちいいです」

約7万8千文字です。
そのうち「うんち」で検索192件。
「オムツ」131件。

ほぼうんちです。排泄です。オムツです。赤ちゃんプレイです。
篠崎の手練手管により安西の内面もどんどん幼児化していきます。
そしてそれに満足して穏やかになっていく篠崎。
セックスほぼしてないです。（オナホ扱い有）
ずーっとお世話です。
便失禁させるための手術もします。

これでこのシリーズは完結です。
お付き合いいただきまして本当にありがとうございました。